

第2章 計画地の現状

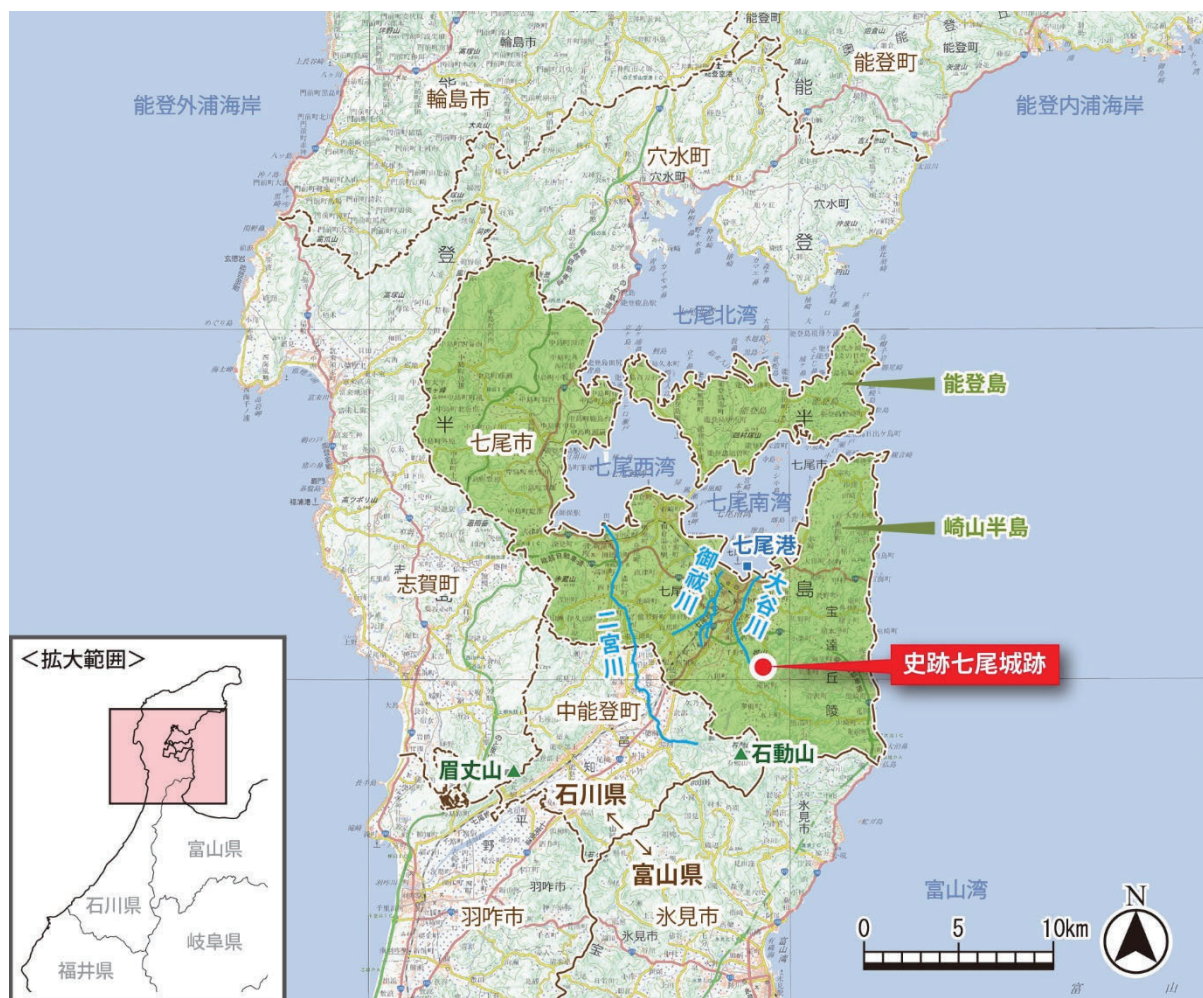
第1節 自然環境

第1項 位置・地勢

七尾市は、日本海に突き出た能登半島の中央東側に位置する。海岸部は、七尾湾から富山湾に面し、内陸部は、北側が穴水町、西側が志賀町、南側が中能登町から富山県氷見市に接しており、天然の良港として知られる七尾港を窓口を発展してきた地方都市である。七尾港は、外洋の日本海交易と七尾湾を中心とした内湾交易、さらには五畿七道の1つである北陸道や奥能登方面に連絡する能登街道の発着地であったことから、海上交通や陸上交通の要衝として半島で重要な役割を果たしていた。

七尾市は、こうした地理的環境により、古代律令国家の地方拠点である能登国府が置かれて以来、近世まで歴代の地方政治拠点が置かれた能登の政治・経済・文化の中心地であった。

現在は、七尾港に面した低地(邑知地溝帯北端)に市街地が展開し、東部から南部には富山県との境界をなす急峻な石動山系が、西部には眉丈山系の山並みが連なり、御祓川、大谷川、二宮川などの河川が七尾湾に注いでいる。海岸線は、日本海からの荒波が打ち寄せる外浦海岸と、波穏やかな七尾湾から富山湾に面した内浦海岸に大別される。こうした海岸線と山並み、河川が連動する里山里海の豊かな自然に恵まれた地域である。



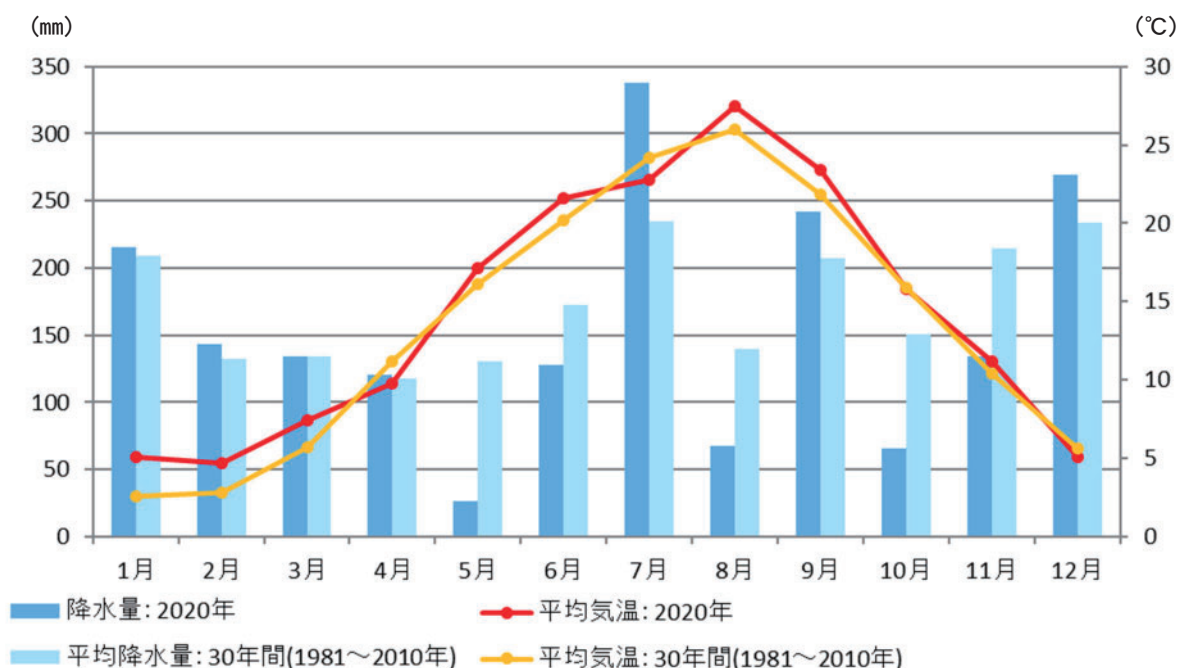
(ベース：国土地理院)

図2-1 地勢図

第2項 気候

七尾市の気象(1981～2010)は、年間の平均気温が13.6℃、降水量が2076.9mm、日照時間が1542.3時間で、積雪は多い年で50～70cm程度ある。日本海側特有の気候で、冬季の積雪と年間降水日数が多いことを特徴とする。

七尾市においても6～9月にかけて集中豪雨が頻発し、様々な被害をもたらしている。表2-1に示すように過去10年間に於いて短時間における雨量が多い傾向にあり、平成29年6月30日から7月3日までの断続的な降雨は7月の平均降水量(235.1mm)に迫る224.0mmを観測した。この時の豪雨では河川の増水や土砂崩れ、家屋への浸水、道路の冠水だけでなく七尾城跡にも多大な被害をもたらした。



(参考データ：気象庁〔七尾〕平年値)

図2-2 七尾市の月別の気温と降水量

表 2-1 七尾市における降水量の順位

| 順位 | 日の最大降水量 | 日の最大1時間降水量 | 日の最大10分降水量 |
|----|-----------------|----------------|----------------|
| 1 | 2013/6/19 208mm | 2010/7/9 70mm | 2008/8/15 23mm |
| 2 | 1990/8/17 195mm | 2017/8/25 69mm | 2019/8/22 21mm |
| 3 | 2018/8/31 172mm | 2019/8/22 68mm | 2017/8/25 19mm |
| 4 | 2017/7/1 166mm | 2013/8/30 61mm | 2013/8/30 18mm |
| 5 | 2008/6/29 160mm | 2018/8/31 58mm | 2008/8/19 18mm |
| 6 | 1998/8/17 145mm | 1998/8/13 55mm | 2010/9/22 16mm |
| 7 | 1985/7/8 144mm | 2008/8/16 51mm | 2010/7/9 16mm |
| 8 | 2009/7/1 137mm | 1990/9/15 49mm | 2013/8/23 14mm |
| 9 | 2014/8/16 134mm | 2008/8/15 48mm | 2014/9/2 14mm |
| 10 | 2011/9/21 134mm | 2014/8/16 45mm | 2013/9/3 14mm |

※ゴシック体は過去10年間

第3項 地形

七尾城跡は、石動山から崎山半島へ延びる石動山系の通称「城山」に位置する。標高300m付近の本丸から三の丸を中心とした主郭部から、邑知地溝帯に向けて派生する尾根筋一帯に曲輪が築かれている。

城山を取り巻く大谷川やその支流の鍛冶屋川、木落川、庄津川から谷(沢)を麓から山頂に向けて登ると、はじめは巨礫も少なく、流れも緩やかな小規模扇状地であるが、徐々に巨岩、巨石(1m以上)が見られるようになる。本丸駐車場・寺屋敷の北側、樋の水東側の木落川が流れる木落谷では、烏帽子谷との分岐を過ぎると傾斜が強くなる。

また、それぞれの尾根には、人為的に作った切岸も見られるものの、大手道の長坂に代表されるように中腹は急峻な痩せ尾根となっている。



(ベース：Google Earth)

図2-3 地形図



(ベース：『保存活用計画』図15 七尾城起伏図)

図2-4 史跡七尾城跡の標高(起伏)図

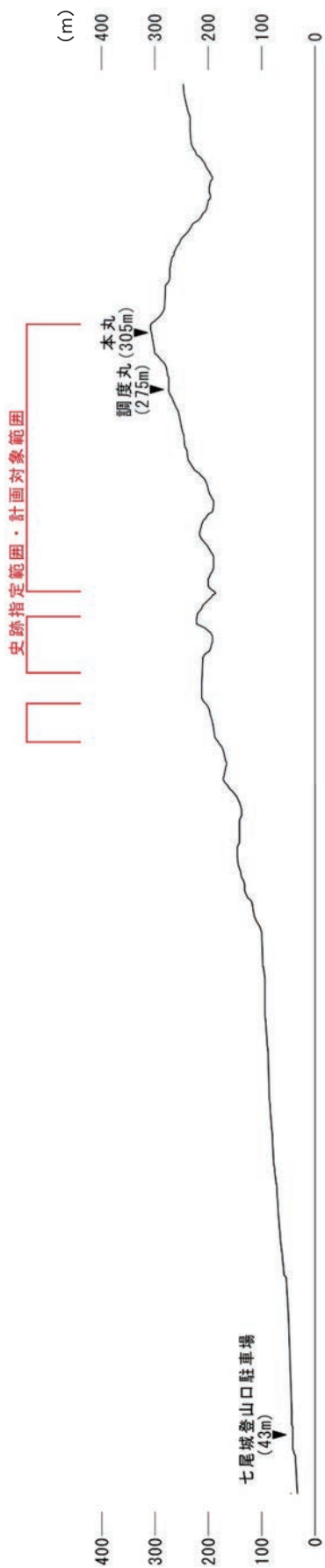
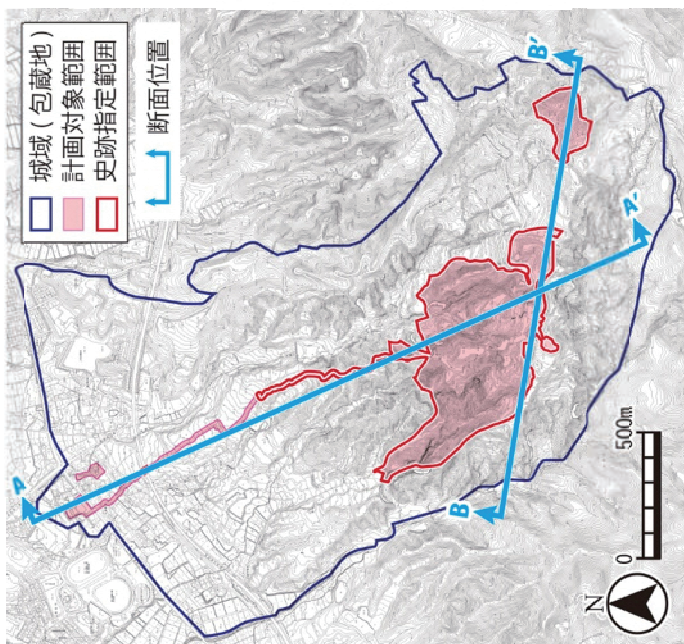


図2-6 A-A' 断面図



(ベース：史跡七尾城跡平面図)

図2-5 断面位置図

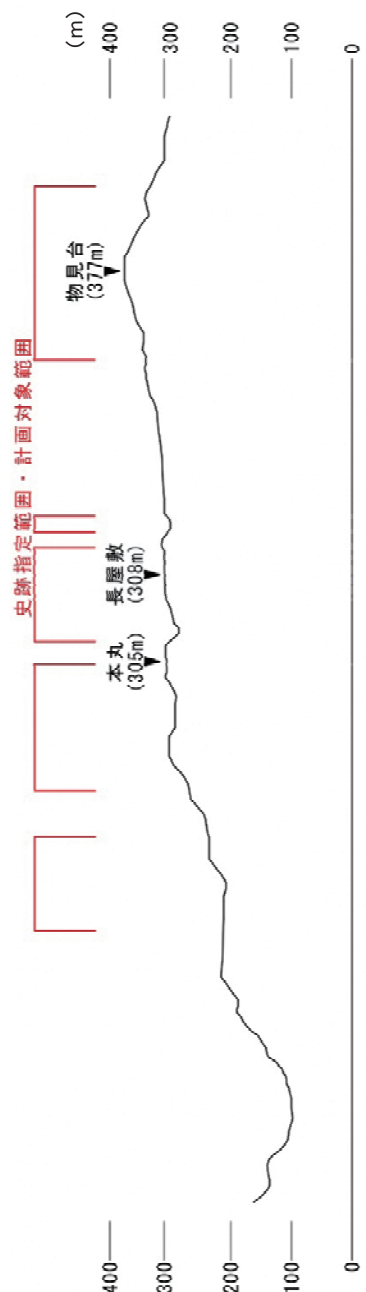


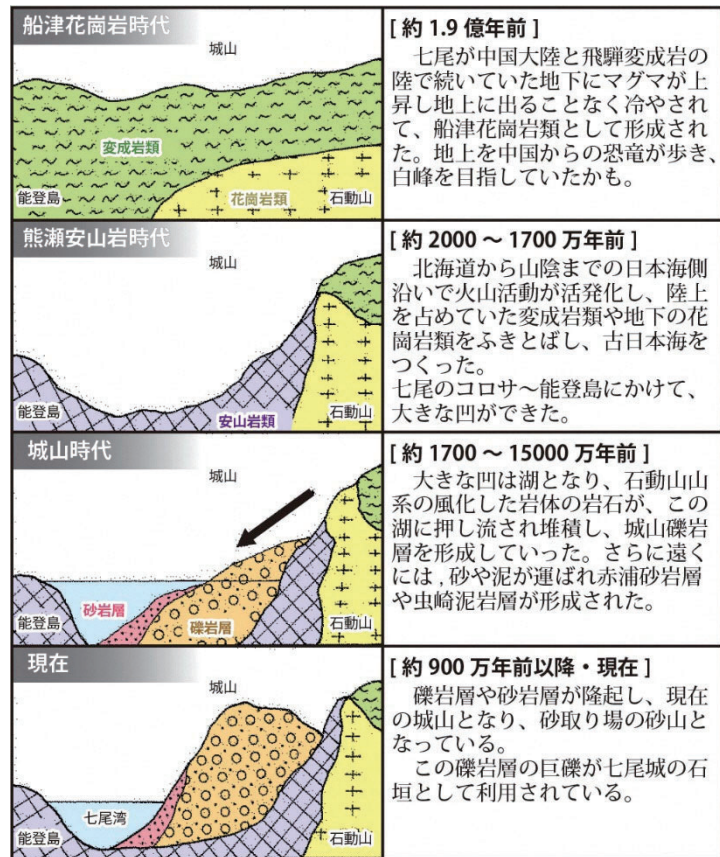
図2-7 B-B' 断面図

第4項 地質

七尾城跡が位置する城山一帯の地層は、下部中新統(約2300万年前から約500万年前までの中新世にできた地層)の城山礫岩層と称されている(糸野編1965)。

①七尾城跡周辺の地質と城山礫岩層

七尾城跡が位置する城山礫岩層の南部には、城山より高海拔の石動山系に至る範囲に、通称熊淵安山岩類・船津花崗岩類、そして飛騨変成岩類が分布している。前期中新世(1700万年～1500万年前)、これらの風化した岩体が風雨によってけずられ、大雨の流れで運搬され堆積して出来たものが、城山礫岩層である。



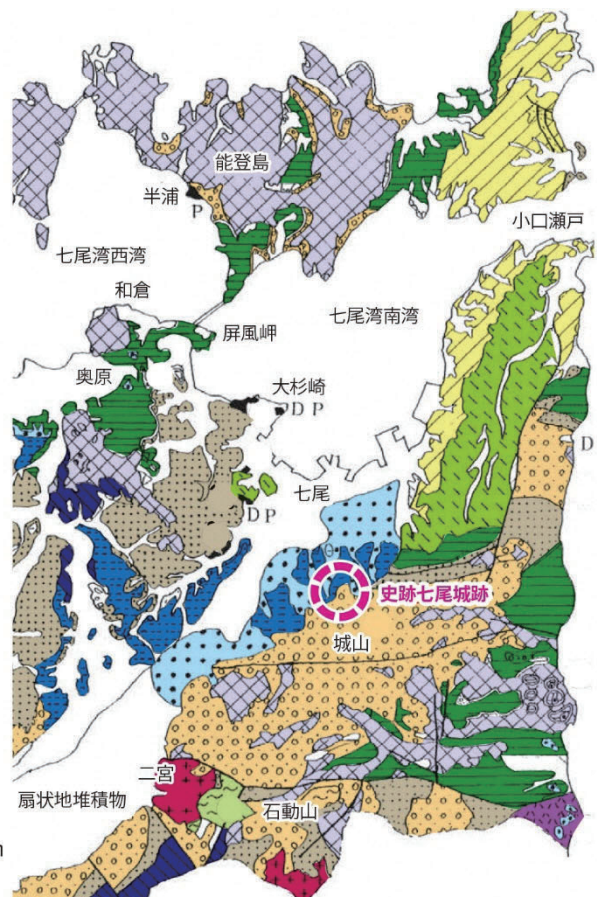
(ベース：『保存活用計画』図26 能登島～城山～石動山の大地変化の模式断面図)

図2-8 能登島～城山～石動山の大地変化の模式断面図

| 地質図凡例 | 和倉～七尾 | 崎山半島～石動山 | Ma | 地質時代 |
|-------|-----------|-------------|------|--------|
| | 沖積堆積物・埋立地 | 沖積堆積物・埋立地 | 0.01 | 第四紀 |
| | 奥原層 | 段丘堆積物 | 0.15 | |
| | 高階層 | | 0.4 | 中新世 |
| | | | 2 | |
| | 小島砂岩層 | 崎山シルト岩層 | 3.5 | 鮮新世 |
| | | 赤崎泥岩層 | 5 | |
| | 和倉珪藻泥岩層 | 虫崎泥岩層 | 9 | 新第三紀 |
| | 海緑石砂岩層 | 海緑石砂岩層 | 13.5 | |
| | 七尾石灰室砂岩部層 | 佐々波砂岩層 | 14 | 中新世 |
| | 赤浦砂岩層 | 庵砂岩類 | 15 | |
| | 七原泥岩層 | 大泊凝灰岩層 | 15 | 前期 |
| | 城山礫岩層 | 百海礫岩層(多根互層) | 17 | |
| | 安山岩類 | 安山岩類 | 20 | ジュラ紀 |
| | | 船津花崗岩類 | 190 | |
| | | 飛騨変成岩類 | 1000 | 先カンブリア |

— 整合 : — 不整合

(ベース：『保存活用計画』図25 七尾城跡周辺の地層名と時代)



(ベース：『保存活用計画』図24 七尾城跡周辺の地質図)

図2-9 史跡七尾城跡周辺の地質図

②七尾城跡の石垣石材

七尾城跡の石垣は、主に花崗岩と安山岩、流紋岩を用いて築かれている。岩質については、下表において簡単に解説する。

表 2-2 岩石の解説

| 種類 | 岩 質 |
|-----|---|
| 花崗岩 | 花崗岩を構成する鉱物は一般に石英・長石・角閃石・黒雲母の4種類で、鉱物の割合や結晶の大きさによって細分化される。石動山のふもと二宮に見られる花崗岩は、鉱物結晶が比較的大きい「斑状」と、角閃石を含む割合が多い「閃緑岩」が加えられた『斑状花崗閃緑岩』に分類される。大きい結晶の長石は肉紅色を示しているが、黒っぽい黒雲母や角閃石の量も多く、石英が半透明で灰色に近いことから全体として暗い。石垣に利用されている花崗岩は、この肉紅色の花崗岩の他、墓石として利用される灰白色の花崗岩もある。温井屋敷にある「九尺石」も花崗岩で築かれている。 |
| 安山岩 | 安山岩は、マグマが地表近くや地表で冷えて固まった火成岩である。岩石の色は、一般に黒っぽいのが、場所によって異なり暗灰色、暗褐色を示す。岩石中にキラリと光る輝石が含まれることから、「輝石安山岩」とされている。 |
| 流紋岩 | 流紋岩は、黄白色の長石と灰色がかかった石英の2つの鉱物が交互に重なって流状を示し、全体に明るい黄白色の火成岩である。石垣に利用されている流紋岩は、風化が進み流状(縞模様)が不明瞭で、斑状結晶を含んでいて、典型的な流紋岩の特徴と異なる。 |

石材の大部分は、城山を構成する城山礫岩層に含まれる岩石で、城跡周辺の崖や尾根・谷に露出していたものを運び出したり、岩石を掘り出して利用したと考えられる。

〈引用文献〉

- 粕野義夫編 1965 『能登半島の地質』「能登半島学術調査書」石川県 P.1-84.
- 粕野義夫編 1993 『新版・石川県地質図(10万分の1)・石川県地質誌』石川県 318pp.
- 野村正純 1996 『七尾市自然環境調査報告書』「地質・化石」七尾市 P.1-34
- 野村正純 2001 『17. 七尾周辺一地層と化石― 北陸の自然をたずねて』
北陸の自然をたずねて編集委員会〔新改訂〕日曜の地学6 築地書館 P.119-125.

第5項 植生

城山一帯の植生は大部分が山林で、七尾城跡中心部の平地や緩い斜面にはスギ林があり、細い尾根や急傾斜地にはヤブツバキ林や落葉樹を中心としたコナラ林が多くみられる。

城山周辺はもともと暖地性のヤブツバキ林であったが、長年にわたる植林などによりアカマツやコナラを中心とした二次林となった。これらの木々は薪や木炭などとして活用され、山中には炭焼き窯跡が残っている。

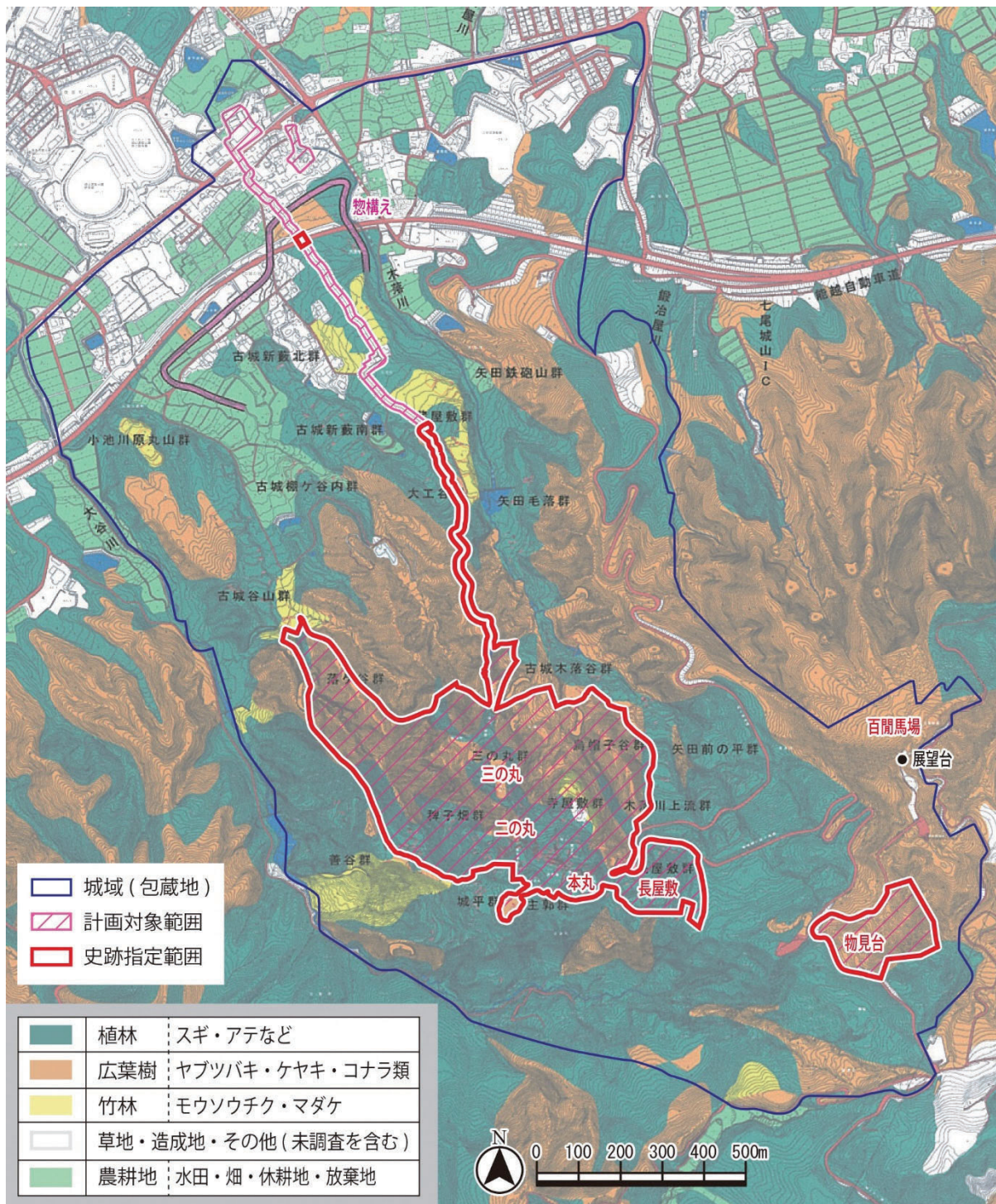
アカマツやコナラの二次林は、炭焼きの衰退とともに建築材となるスギやアテ(アスナロ)林に代わっていった。しかし、建築材として利用出来るまでに成長した頃には、安価な外国産材の大量輸入により需要が減少したため、山林の手入れが行き届かなくなった。

最近は、一部で強制伐採が行われているものの荒廃が甚だしく、モウソウチクが低地からスギの植林地に入り混み、長屋敷や善谷群ではマダケが繁茂している。また、スギが植林されていない雑木林においても、ササ類が覆い尽くしてきている。

平成22年(2010)頃には、カシノナガキクイムシが大発生したことによりナラ枯れが発生し、ミズナラやコナラの大木が枯死した。

安寧寺から北東に延びる尾根筋には、戦時中コルクの代用として植林されたアベマキの巨木が見られ、二の丸や本丸駐車城周辺などには、モミジ類やサクラ類が植林された。

保存活用計画策定時(平成29年度)に植生調査を行い、城域一帯の植生図を作成した(図2-10)。

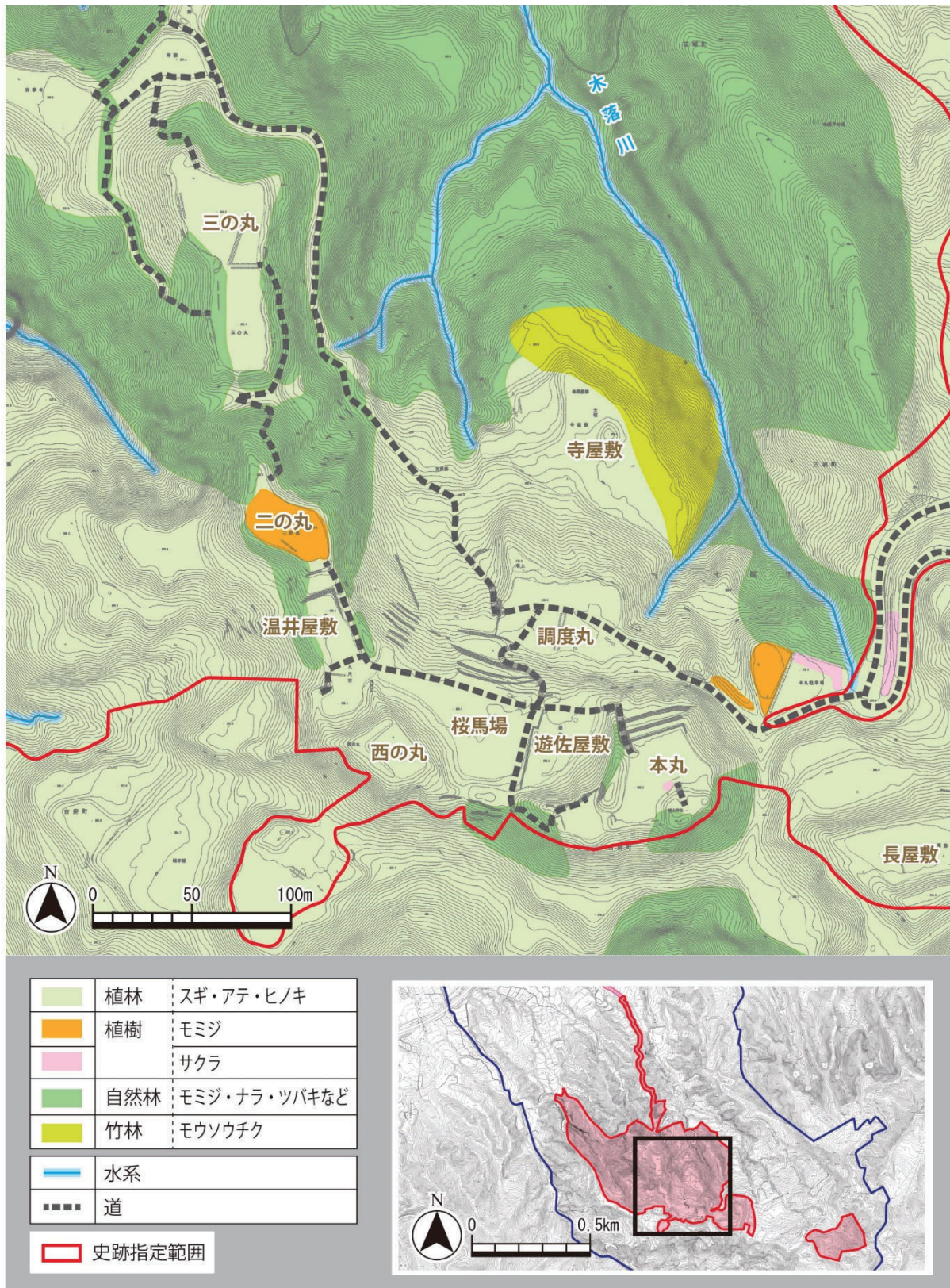


(ベース：『保存活用計画』図23 七尾城跡周辺の植生分布図)

図2-10 史跡七尾城跡周辺の植生図

山林の荒廃や休耕田の増加により山道がどんどん失われつつあることに加え、昨今のイノシシ被害の増加によって山林の荒廃が進行し、植生も大きく変わりつつある。

本整備基本計画の策定にあたっては、既存木の取り扱いの検討に必要な基礎資料を得るため、本丸および二の丸等の中心部を対象とした植生調査を行った(図2-11)。



(ベース：[上図]測量図×数値地形図 / [下図]史跡七尾城跡平面図)

図2-11 史跡七尾城跡中心部の植生図

第2節 歴史的環境

七尾城は戦国時代に能登畠山氏が領国支配の拠点として、現在の石川県七尾市古府町竹町古屋敷町入会地一帯の石動山系の要害に築いた山城である。標高300mの本丸を中心として、掌を広げたように派生する尾根筋一帯に多数の曲輪を連ねている。主な遺構は外堀に見立てた東側の木落川から西側の大谷川に挟まれた範囲に所在し、麓の城下を含めた範囲は、東西約1.2km、南北約2.5kmの範囲にある。特に、中心部となる本丸周辺の曲輪は、石垣で固められている。

七尾城を築いた能登畠山氏は、応永15年(1408)に創立した室町幕府管領畠山氏の有力庶流である。能登守護職であり、室町幕府の最高権力者グループである御相伴衆も務めた幕閣の重臣であった。当時、守護は在京を原則としたことから、畠山氏が領国能登に在国して政務を執るようになるのは応仁・文明の乱(1467～1477)以降の第3代義統からである。

文明10年(1478)に下向した義統は、その政治拠点を港付近の「府中」に守護所を置いたが、第7代義総の治世下である大永5年(1525)までには、それまでの守護所と立地環境が全く異なる石動山系の要害に七尾城を築き、拠点を移している。往時の七尾城については、たびたび下向していた京の禅僧である彭叔守仙が天文13年(1544)に記した「独楽亭記」に、「天宮」と称する大規模な城郭とそれに連動する「千門万戸」と称された活気あふれる城下の町並の様子が記されている。

その後、第8代畠山恵祐(義統)・第9代義綱が弘治3年(1557)に、長尾景虎(上杉謙信)に宛てた書状に「当城彌堅固候」と記しているように縄張りが増強されるが、天正5年(1577)には上杉謙信の侵攻により落城する。このことにより七尾城は、上杉氏の能登の支配拠点となるが、天正6年の謙信の急死に伴い、織田方の支配下となり前田利家が入城する。しかし、利家は天正17年(1589)までには、港付近の小丸山城に拠点を移したことにより廃城となる。廃城後の七尾城の動向については、江戸時代には加賀藩が鎌留御林として管理したことから、城郭遺構が良好な状態で残され、今日に受け継がれている。

表 2-3 能登畠山氏・七尾城跡略年表

| 年号 | (西暦) | 主な出来事 | 領主 | 拠点 | |
|--------|--------|---|------|-------------------------|---------------|
| 延元 3年 | (1338) | 足利尊氏が征夷大將軍となり、室町幕府が成立する。 | 畠山 | (守 護 代 所) 中 | |
| 明德 2年 | (1391) | 畠山基国、河内・越中とともに、能登守護となる。 | | | |
| 応永 13年 | (1406) | 畠山基国が没し、次男満慶が家督を継ぐ。 | | | |
| 応永 15年 | (1408) | 畠山満慶、畠山家の家督を兄の満家に譲り、満家から能登守護を与えられる。能登畠山家(畠山匠作家)を創設する。 | 能登畠山 | 府 中 守 護 館 | |
| 永享 4年 | (1432) | 畠山満慶没し、長男義忠が家督を継ぐ。 | | | 初代 みのり 満慶 |
| 亨徳 4年 | (1455) | この頃、畠山義統が守護となる。祖父の義忠が隠居する。 | | | 二代 よしただ 義忠 |
| 応仁 元年 | (1467) | 畠山義統、西軍方で応仁の乱に参戦する。 | | | 三代 よしむね 義統 |
| 文明 10年 | (1478) | 応仁の乱が終わり、この頃、畠山義統、能登に下向する。 | | | |
| 文明 15年 | (1483) | 畠山義統、府中守護館で連歌会を催し、「賦何船連歌」が詠まれる。 | | | |
| 延徳 2年 | (1490) | 畠山義元、能登に下向する。 | | | |
| 明応 6年 | (1497) | 畠山義統没し、長男義元が家督を継ぐ。 | | | 四代 よしもと 義元 |
| 明応 9年 | (1500) | 守護代の遊佐統秀ら、義統の次男慶致を守護に擁立する。義元は越後へ逃れる。(明応の政変) | | | 五代 のりむね 慶致 |
| 文亀 3年 | (1503) | 畠山慶致、父義統の七回忌法要を瑞応山大寧寺で行う。 | | | |
| 永正 5年 | (1508) | 畠山義元、越後から戻り、再び能登守護となる。 | | | 六代 よしもと 義元 |
| 永正 12年 | (1515) | 畠山義元没し、慶致の長男義総、能登守護となる。 | | | 七代 よしふさ 義総 |
| 大永 3年 | (1523) | 七尾の招月庵で「賦何路連歌」が詠まれる。 | | | |
| 大永 5年 | (1525) | 七尾城内の義総邸で「賦何人連歌」が詠まれる。 | | | |
| 大永 6年 | (1526) | 畠山義総、七尾城内で歌会を催し、冷泉為広・為和父子、列席するが、同年冷泉為広 七尾で没する。 | | | |

| 年号 | (西暦) | 主な出来事 | 領主 | 拠点 |
|--------|--------|---|-----------------------|--------------|
| 天文 8年 | (1539) | 絵師の長谷川等伯(信春)、七尾に生まれる。 | | 七尾城(山城と城下) |
| 天文 13年 | (1544) | 禅僧の彭叔守仙が「独楽亭記」に七尾城と城下の様子を記す。 | | |
| 天文 14年 | (1545) | 畠山義総没し、次男義統が家督を継ぐ。 | 八代 よしつぐ 義統 | |
| 天文 16年 | (1547) | 畠山駿河(義総の弟)ら、能登に侵入し、重臣の温井総貞らによって鎮圧される。 | | |
| 天文 19年 | (1550) | この頃、能登の内乱(遊佐統光と温井総貞の対立)によって七尾城下が焼失する。 | | |
| 天文 20年 | (1551) | この頃、重臣七名からなる「畠山七人衆」が領国支配の実権を握る。 この頃、畠山義統の長男義綱が守護となる。隠居した義統は恵祐と号し、義綱の後見人となる。 | 九代 よしのな 義綱 | |
| 弘治 元年 | (1555) | 畠山義統・義綱父子らが、温井紹春を謀殺し、大名権力の回復をはかる。 温井一党が一向一揆などの支援を得て、七尾城方と対峙する。(弘治の内乱) | | |
| 永禄 9年 | (1566) | 重臣らが畠山義綱を追放し、長男義慶を守護に擁立する。 | 十代 よしのり 義慶 | |
| 永禄 11年 | (1568) | 畠山義綱、七尾城に攻め込み、包囲する。 | | |
| 天正 2年 | (1574) | 畠山義慶、重臣に毒殺され、弟義隆が家督を継ぐ。 | 十一代 よしたか 義隆 | |
| 天正 4年 | (1576) | 越後の上杉謙信、能登へ攻め入り、七尾城を囲む。 | | |
| 天正 5年 | (1577) | 遊佐・三宅・温井氏らが上杉方に内応し、開城に反対する長氏一族を謀殺する。七尾城が落城し、能登畠山氏が滅亡する。 上杉方の鰐坂長実が七尾城代となる。 | 上杉 けんしん 謙信 | 小丸山城(平山城と城下) |
| 天正 6年 | (1578) | 上杉謙信、急死する。(48歳) | かづかつ 景勝 | |
| 天正 7年 | (1579) | 温井景隆ら鰐坂長実を追放し、七尾城を奪い返す。 | | |
| 天正 9年 | (1581) | 織田信長、菅屋長頼を七尾城代とし、温井景隆・三宅長盛が石動山へ退き、その後越後へ行く。 前田利家、織田信長より能登一国を与えられる。 織田信長、菅屋長頼に能登・越中の城割りを命じ、安土へ戻らせる。 | 織田 すがやながより 菅屋長頼 | |
| 天正 10年 | (1582) | 本能寺の変で織田信長が自害する。(49歳) 温井景隆・三宅長盛ら、越後勢とともに石動山に入るが、前田利家・佐久間盛政らによって滅ぼされる。 利家、石動山を焼き討ちする。(石動山・荒山の合戦) この頃から、前田利家が所口の小丸山に築城を開始する。 | 前田 としいえ 利家 | |
| 天正 11年 | (1583) | 前田利家、豊臣秀吉より、石川、河北二郡を与えられ金沢(尾山)へ移る。 前田安勝(利家の兄)が、七尾城代となる。 | 城代 やすかつ 安勝 | |
| 天正 12年 | (1584) | 前田利家、加越国境などで越中の佐々成政と戦う。 佐々成政勢が七尾城を包囲する。 | | |
| 天正 13年 | (1585) | 佐々成政、羽柴秀吉に降伏する。 | | |
| 天正 17年 | (1589) | 愛宕山の気多本宮や小島・所口の百姓屋敷を明神野に移す。 | | |
| 文禄 2年 | (1593) | 前田利家の次男利政、豊臣秀吉より能登一国を与えられる。 | としまさ 利政 | |
| 文禄 3年 | (1594) | 前田安勝没する。長男利好が七尾城代となる。 | 城代 としよし 利好 | |
| 文禄 4年 | (1595) | 所口の惣構え堀の開削を進める。 | | |
| 慶長 4年 | (1599) | 前田利家、大坂で没する。(63歳) | | |
| 慶長 5年 | (1600) | 関ヶ原の戦い。 前田利政が改易され、利政領は加賀藩領となる。 | としなが 利長 | |
| 慶長 8年 | (1603) | 徳川家康、江戸幕府を開く。 | 城代 ともよし 知好 | |
| 慶長 15年 | (1610) | 前田利好没する。利家三男知好が七尾城代となる。 長谷川等伯、江戸で没する。(72歳) | | |
| 元和 元年 | (1615) | 「一国一城令」が出される。 | | |
| 元和 2年 | (1616) | 七尾城代前田知好(利家三男)、京へ上り七尾(小丸山)城廃城。 | | |